

## 五百木良三の「世界綜合論」

——戦前期日本における自文化中心主義に関する一考察——

石 川 徳 幸

### 一、問題の所在

五百木良三（一八七〇～一九三七）は、明治期から昭和初期にかけて活躍したジャーナリストであり政治活動家である。<sup>①</sup> 五百木良三が新聞記者として活躍したのは、日清戦争期から日露戦争開戦直前までの十年程のことであり、この間、陸羯南が主筆兼社長であった新聞『日本』において編集長まで務めた。しかし、明治三十六年に衆議院議員の小川平吉らとともに、当時貴族院議長であった近衛篤磨を頂いた対露強硬内閣の樹立を画策し、日本新聞社を辞めて政治の世界に身を投じた。<sup>②</sup> この計画は近衛の薨去によって頓挫し、これ以後、五百木良三は「浪人」の立場から政治活

動を続けるようになる。櫻田倶楽部や城南荘といった政治団体を率いて日韓併合推進運動や満蒙独立運動に関与した後、昭和四年には新聞『日本』の流れを汲んだ雑誌『日本及日本人』（第二次）を発行する政教社の社長に就任して、ふたたび操觚業に従事した。晩年は『日本及日本人』における言論活動と実践的な政治活動とによって、ロンドン海軍軍縮条約反対運動<sup>③</sup>や国體明徴運動を展開した。本稿は、このように明治末期から昭和初期にかけて、所謂「右翼」と呼ばれる立場で活躍した五百木良三の政治活動と、その思想について検討するものである。具体的には、昭和初期において五百木良三が唱えた「世界綜合論」の論理を明らかにするとともに、同時代における位置づけを明らかにすることが本稿の主たる目的である。

五百木良三を研究対象とする意義についても述べておきたい。五百木良三は戦前においては頭山滿や内田良平といった右翼の頭目と伍する存在として認知されていた人物でありながら、戦後はその業績に比して十分に顧みられることのなかった人物である。加えて言えば、五百木良三が同時代人には名の知られた政治活動家であった上に、主宰していた雑誌『日本及日本人』も発行部数三〇〇〇〇〜四〇〇〇〇部程度と一定の読者を得ていたことも分析対象として重要な点である。<sup>⑤</sup>筆者は先にまとめた別稿の結論部分において、当該時期の「右翼」を扱った研究の多くが「いわゆる「右翼」による圧力に抵抗した人物の側ばかり関心が集まり、戦前日本の社会に超国家主義的な思潮を瀰漫させた「右翼」側の研究が閑却されるという背理的状況に陥ってきた」<sup>⑥</sup>ことを指摘し、戦前の「右翼」的言説を分析し直す研究の必要性を示した。本稿の立場はこれを引き継ぐものである。言論活動と実践的な政治活動の両方を担った五百木良三を通して、当時の時代思潮を捉える一助としたい。

五百木良三に関する先行研究には、松本健一による業績があげられる。<sup>⑦</sup>松本書は、俳界で「瓢亭」の名で知られた

ほかは一般的な知名度に乏しかった五百木良三について、正面から取り上げた唯一の評伝である。松本書は『昭和史を陰で動かした男』という書名が示すとおり、日比谷焼打ち事件や原敬首相暗殺事件、そして二・二六事件といった近代史上の重要な出来事の陰に隠れた「忘れられたアジテーター」としての五百木良三を描き出している。しかし、五百木良三が新聞社を辞めて政治活動を本格化させたのは三十五歳以降のことなのであるが、松本書は七章立てのうち五章分が少年期から日本新聞社時代を扱ったものであり、政治活動を中心とした三十代半ばから六十代後半までの活動は十分に描ききれていない。これは、史料の制約に起因したものと思われる。五百木良三の「浪人」時代の活動は、本人の手によって足跡が消されている面がある。例えば、五百木は生前に政教社社員であった阿部里雪に対して、「俺は日比谷の焼き打ち事件のあった時、日記をつけていたのを警視庁の家宅搜索で見つけられ友人たちに迷惑をかけたことがあった。爾来日記は句日記にした<sup>⑧</sup>」と述べた旨が伝えられている。しかしながら、そうであればこそ、五百木良三に関する研究は実証的な検討を重ねて明らかにすべき余地を多く残しているとも言える。筆者は今回、五百木良三の晩年の活動を考察の範囲として、周辺人物に関わる史料を参照するとともに、『日本及日本人』以外の零細な雑誌に掲載された言説を掘り起していくことで、先行研究を補う新たな知見を模索した。先行研究を踏まえた上で、改めて本稿の課題と意義を問えば、こうした作業を通じて、五百木良三の晩年における言説と実践的な政治活動とに見出される政治的思想の論理を詳らかにし、その同時代的特徴を明示することにある。

なお、本文中において、現代では差別的表現とされる呼称を用いる場合があるが、これは史料上の記載をそのまま紹介することを重視したためであり、筆者の個人の思想や政治的意見を表すものではないことを付言しておきたい。

## 二、五百木良三の政治思想の淵源

本題に入る前に、まずは五百木良三の思想形成の道程を明らかにしておきたい。五百木良三は学生時代に、松山医学校に通うかたわら、河東静溪が主宰していた千舟学舎に寄宿して漢学を修めている。河東静溪は江戸時代に藩学明教館の教授を勤めた人物で、俳人河東碧梧桐の父にあたる人物である。五百木良三の従兄にあたる藤田禎一郎は、千舟学舎に通っていた当時の五百木良三に関して次のように述べている。

十五六年頃から松山市千舟町に在りし儒者河東坤先生の塾に我等兩人茲でも揃つて入塾し同師の厚き指導を受けた。要は彼の風格と精神と漢学的素養は茲にて此師より培養せられたりと信ずる。「中略」要するに彼は少年時代に於て、豊かなる自然美の境地に健全に發育し、青年時代に醇厚崇高なる恩師から道義觀念を植付けられたのである。二つながら彼は深く恵まれ、後日の彼の精神の種は此時に播かれたと信ずる。<sup>9)</sup>

こうして十代において医学と漢学を修めた五百木良三は、医術開業の免状を取得後、ドイツ語の勉強のために上京して、旧松山藩主久松家が奨学機関として運営していた寄宿舎常磐会に入った。ここで同郷の正岡子規と出会い、一時は文学に傾注するようになるのであるが、五百木良三の文芸活動に関しては別稿を期したい。本稿の主題である五百木良三の政治思想に最も重要な影響をもたらしたのは、正岡子規の周旋によって就職した新聞記者時代のことである。新聞『日本』の社長兼主筆であり、正岡子規の庇護者としても知られている陸羯南は、五百木良三を記者として採用して貴族院の担当を任せた。新聞『日本』は、そもそも、明治二十二年に陸羯南が「日本旨義」を謳って創刊したもので、前年に三宅雪嶺らの政教社が「国粹主義」を掲げて発刊した雑誌『日本人』とともに、政府が主導した欧

化主義を批判したメディアである。その後、明治二十年代から三十年代を通して、陸羯南ら日本新聞社のメンバーは対外硬運動の中心となっていくのであるが、これらの運動の領袖となった人物が、当時、貴族院議長を務めていた近衛篤磨であった。対外硬運動の中心であった日本新聞社に所属し、なおかつ貴族院の担当記者であった五百木良三は、次第に近衛篤磨の知遇を受けるようになり、五百木自身も政治に関わるようになっていったのである。この頃の五百木良三に関して、本人が次のような回想を残している。

私が公爵〔近衛篤磨のこと〕——以下、引用文中の甲括弧内は引用者註〕にはじめて御目にかゝつたのは、まだ若い時分、日本新聞の記者をして居つた当時のことで、紹介してくれたのは大内〔暢三〕君や菊池謙讓君（当時国民新聞記者）などであつたと思ふ。御縁があつたものと見えて、年は七つも八つも違ふのですが、弟分で気安いところがあつたものか、比較的愛されて居りました。〔中略〕

実は私は正岡子規と一緒に俳句をやつたりして、その関係で日本新聞へ入つたので、最初は文芸を以て立たうなどと考へてゐたのですが、一度公爵に御縁があつて以来、すっかり方針が變つてしまつて、対外問題に没頭するやうになつた。<sup>11</sup>

こうして「対外問題に没頭する」ようになった五百木良三が、近衛篤磨の翼下でいかにして働いていたのか、一つの例を示しておく。明治三十三年九月、近衛篤磨を会長とした国民同盟会が発足し、アジア主義を基盤とした政治運動が展開された。この国民同盟会の意見を世の中に広める目的で、近衛篤磨は個人の出資によつて雑誌『東洋』を翌三十四年に創刊している。その際、近衛篤磨は日本新聞社から五百木良三を割愛させ、雑誌『東洋』の編集長に就かせたのである。<sup>12</sup>この『東洋』の創刊号に掲載された近衛篤磨の論文「所謂満洲問題」は、五百木良三の手によるもの

であった。当該論文には「三月二十七日社員筆記」との付記があり、近衛篤磨の日記には、三月二十六日付けで「五百木良三来るに付、満州問題に就ての意見を告げ筆記せしむ」<sup>(13)</sup>と記載されている。五百木良三も回想において、「その第一号に、故公の大抱負即ち満州問題に対する意見を書かなければならぬことになった〔中略〕。公爵が世界に向つて宣言される文章を書くのですから、私もいさゝかビク／＼して、大体の骨子だけ承つたのを書上げて、恐る／＼持つて行つた。〔中略〕見て戴いたところ、これでいゝよ、といふわけで、極めて手輕に及第しました」<sup>(14)</sup>と述懐している。

このようにして近衛篤磨のアジア主義に傾倒していった五百木良三は、明治三十七年に近衛篤磨が薨去した後は、「吾々はこれから葬合戦に取掛らなければならぬ」<sup>(15)</sup>として、在野の立場——すなわち「浪人」ないし「右翼」活動家としての立場——から実践的な政治活動を展開していくことになる。以後、昭和四年に政教社の社長として招かれ、雑誌『日本及日本人』（第二次）を主宰するようになるまでの凡そ二十五年間は、政治活動に関連して数点のパンフレットを発行したことが確認できるが、運動の足跡自体は史料の制約によって現時点では詳らかにし得ない点が多い。そこで、本章の目的である思想形成の道程としては壮年期の活動が抜け落ちる形となり慚愧に堪えないが、それらは今後の研究の課題とし、次章からは五百木良三が晩年に主宰した『日本及日本人』を中心として、本論の主題である五百木良三が披瀝した政治思想について検討していくこととする。

### 三、五百木良三の「世界綜合論」

#### (一)「世界綜合論」の論理

昭和四年九月、五百木良三は井上龜六のあとを受けて政教社の社長に就任した。<sup>(16)</sup>その後、十一月一日に発行された『日本及日本人』一八八号は、同誌の編集が五百木体制に刷新された「革新号」として位置づけられるものである。もともと、五百木良三は社長就任当初はあまり編集に口を出さなかったようであり、<sup>(17)</sup>五百木が同誌に積極的にかかわるようになるのは、昭和十年以降、国體明徴運動の時期からである。

革新号に関して五百木良三は、「内は天皇親政中心に、国體觀念を徹底せしめ、外は世界進出を絶叫して皇国の使命を示教」<sup>(18)</sup>する路線を取っており、自ら「日本民族の個性と其使命（皇道日本の分担的天業）」<sup>(19)</sup>と題した論文を掲載して持論を展開した。なお、同論文は雑誌掲載時においては執筆者名を明記していないが、のちに同じ内容の文章が「日本民族綜合天職論」と改称され五百木良三の名で発表されている。<sup>(20)</sup>また、同論文で展開される世界綜合論に関しては、「五百木君には機会ある毎に会って世界綜合論も聞かされ、時局問題に対する所見も聞いた」<sup>(21)</sup>、「晩年の五百木翁が運命論者であったことは天下に有名な話で、〔中略〕事ある毎に此一定せる運命觀から説明を下だして居られた」<sup>(22)</sup>といった複数の証言が確認できる。これらのことから、同論文が直接本人によって筆記されたものなのか口述筆記で記録されたものであるのかは判じ得ないが、五百木良三の主張であると同意して間違いない。

五百木の論文「日本民族の個性と其使命（皇道日本の分担的天業）」（以下、五百木論文と記す）が掲載された『日本及日本人』一八八号は「世界進出号」という特集が組まれたものであり、五百木論文は巻頭言に次ぐ「主張」欄に収め

られている。同論文は九つの節によって構成されているが、まずはその要旨を簡単に見ていきたい。

第一節は、「実に森羅万象の一切は悉皆千差万別」であり、この世に一つとして同じものはなく、それぞれの存在が各個に重大な使命を持つという運命論的な立論から始まる。五百木によれば、それぞれの存在は渾然一如となって総合し、「天地の一大芸術」を表現しようとする「分業的創造者」として位置づけられる。

第二節では、このことを人体の細胞に例えて、「一切の差別相は直に之れ一切の個性的表徴にして、其の個性の分賦はやがて分業的使命を意義し、其の分業の目的は実に唯一の総合に存す」という主張を展開する。先述のとおり、五百木良三は十代で医師の免状を取得し、日清戦争には看護長として出征した経歴を持つ人物である。細胞を例えとする転義法は、このような経歴を持つ五百木ならではの表現といえるだろう。

第三節では、ここまで示した持論を、人類社会の現象について一般化させている。すなわち、世界中の民族ないし国民は、それぞれが天賦の個性に基づいて特有の文化を創造しているが、それらの「異彩ある個性的文化は、亦た均しく総合を目的に作為されつゝある」と自説を展開している。そのうえで、「既に一切の差別相が総合を目的とせる分業的個性の発露なりとせば、其の一切の差別を包容するところの担当者、即ち分業者中の分業者たる総合的分業者の存在は必至の理路である」と、世界中で創られてきた多くの文化を総合する作業を担う存在の必要性を指摘している。そして五百木は、「吾人人類文化の総合完成は唯一に我日本民族の分業的使命に属す」として、「総合的分担者」が日本民族であると位置づけるのである。

第四節では、日本民族の総合性について民族思潮の淵源を神話から探る作業を行っている。少々長い引用となるが、「世界総合論」の論理の基底を示す部分であり、後述する比較のためにも原文の要所を確認しておきたい。

抑々我民族發生の始原は果して何であるかの疑問に対し、我神話は明白に天之御中主命を指示して居る。吾人は是れを民族の思想的方面より観て、先づそこに多大の感興を惹起する。試みに天之御中主命なる尊称を分析してみよ。其の内実質として残す所のは、唯だ「中」の一字に出でず、爾他は単なる尊重の敬語に過ぎぬではないか。嗚呼「中」よ。唯だ此の一字、之れ実に我祖先の胸中に湧出せる唯一の理想であり、同時に我民族思潮の淵源である。而かもこれは又た何たる高遠偉大の理想であらう。円満美妙の思想であらう。蓋し、「中」とは、孔子の所謂中庸の道である。老子の所謂混沌の境である。釈氏の真如もこれである。基督の愛の神格もこれである。易の大極無限も亦たこれである。無数の数の母体たる零。無限の線の基根たる点。一切の真理は揮べて唯だ「中」の一字に歸するのである。既に克く「中」なるが故に不偏不倚である。故に正直であり清明である。我民族固有の神道が、常に清きを好んで穢れを惡み、明きを求めて暗きを避け、直きを守りて曲れるを斥くると共に、惟神の道として専ら自然を尊重し、無私無我の大法に融和せんとするは、実に此の「中」なる思潮の流れを明示する所以である。<sup>(23)</sup>

このように第四節では、神話を介して日本民族の思想を説き起こした上で「綜合とは直に之れ唯此の『中』の一字の作用を云ふに外ならぬ」として、日本民族の総合性を裏付けようと試みている。

第五節では、日本の文化史が綜合作用の積層であることを例証する作業を行っている。五百木は日本の文化について、「政治に宗教に哲学に科学に、文学であれ芸術であれ、爾他文化ともいふ一切の文化の総ては、殆んど他民族より輸入されたる外来文化」であるとし、これは「凡そ人類間に産出する文化は、其の孰れの民族の創作たるを問はず、一度び是れに触るれば、悉く一様に吸収し摂取し得る」という日本民族の特徴であると論じている。こうした日本人

の特徴を「模倣的民族」として軽侮する見方に対しては、「模倣と綜合は固と似て非なるものである」として、そうした指摘を斥けている。五百木によれば、模倣が単なる鍍金に過ぎないものであるのに対し、綜合とは円融調和によつてより偉大なる真生命を付与する働きを示すものとして説明される。また一方で、五百木の批判は所謂「右翼」の側の立場にも向けられている。すなわち、日本の西洋化に憤慨して頻りに日本独自の文化創造を絶叫するような反動的覚醒家に対しても、その目的が多民族のような対立的ないし特殊な固有性の文化にあるのであれば、それも一つの錯誤であると論じているのである。何よりもここで強調されているのは、日本がそのような綜合文化を創作する唯一の担当者であるという点である。

こうして、五百木は「日本民族の個性と其の使命」とは何であるかを論じたうえで、第六節以降は当時の時事問題に関する自説を展開している。具体的には、第六節においては日本の国體について論じ、第七節以降では大陸政策等の外交問題を論じている。そして、最後の第九節では、「第二の世界的大乱を招致せんとするの兆候さへ窺われる」世界情勢を鑑みて、「先きに日露戦役を機として順次覚醒し来れる東洋の被征服民族は、各自他の桎梏を脱せんとして、我が皇道日本の蹶起を期待し、今や一斉に目を東方日出づるの邊に集注しつゝある」として、「日本の天業」を推進する機運が熟成されつつあることを主張して論を結んでいる。

ここまでに見てきた五百木論文において示された「世界綜合」の論理は、五百木良三が執筆した他の論説記事でも散見される。とりわけて五百木の比較文化観の中でも、西洋を利己的な霸道的文化、東洋を道徳的な王道的文化と見做し、当時の国際情勢を霸道文化が王道文化を蹂躪しつつあるものとして捉える視座は幾度となく用いられている。<sup>24</sup>こうした視座から、五百木の政治的言説においては「現代の暗澹たる霸道的闘争世界をして、光明ある王道的一如世

界に更生せしめん<sup>(25)</sup>」といった主張がなされ、その天業を担うものが皇道日本であると説かれていた。その一方で、東洋の国同士である日本と中国との衝突については、「皇国本来の生命たる世界皇化の一大使命達成に伴ふべき世界的進出が、其の道程に於て早晚遭遇すべき自然の運命<sup>(26)</sup>」であるとして、人為的問題ではなく宿命的因縁と見做している。むしろ五百木は、「日支問題」の背景には英米ソら反日国際勢力があるとして、日本を包囲する「赤蘇勢力」の一掃こそが問題解決の先決要件であると捉えていたようである。

なお、ここまで見えてきた五百木論文は昭和四年に公表されたものであるが、この中で確認できた「日本の天業」に関する論理は、大正五年に五百木が公表した論文「世界の維新と日本の天職<sup>(27)</sup>」において、すでに現出していたものである。雑誌『一大帝国』に寄せたこの論文の中で、五百木は「東洋人の勃興復活と云へば、そは必ず日本を中心として起らなければならぬ事は云ふ迄もないが故に、此意味に於て今日の日本は実に容易ならざる時運に際会して居る、即ち東・西・文・明の調和を計り、東・洋を指導して世界の不平均を矯むるの責任は皆一に日本に係つて居るのである<sup>(28)</sup>」圈点は引用者<sup>(28)</sup>」と述べており、ここに「世界綜合論」の原型を見ることができるのである。

## (二)「世界綜合論」の時代的特徴——「国民道德論」・「世界皇化論」との比較

五百木論文に見られた比較文化観は、今日では極めて恣意的なものに見えるだろう。時代思潮の一端を窺う史料としては興味深いが、現代の視座からすれば荒唐無稽にさえ思われる「世界綜合論」の論旨そのものに、ここで云々してもあまり実りの多い議論にはならない。むしろ、『日本及日本人』を主宰した五百木良三の思想的発露として同論文がいかに位置づけられるのか、あるいは、このような主張が同時代においていかなる意味を持つものであったのか

が重要な関心事となる。当時にあつて、五百木論文のように日本の独自性と優位性を主唱する言説は、決して珍しいものではなかった。例えば、後藤新平が大正年間に著した『日本膨張論』の中には、その立論部分において「世界に民族の数多しと雖も我が大和民族程、特殊の地理と特殊の歴史と特殊の文明と特殊の性情とを有つて居る特殊の民族は無い。乃ち日本民族程世界に無比な民族は無いのである〔中略〕兎に角日本民族が全体として一大家族とも見るべき血族関係の上に純一無雜の結合をなしつゝある事、皇室と国民との関係が義は君臣にして情は即ち父子の如き状態にある事、所謂神ながらの道と称する一種特絶の民族的精神を有つて居る。所謂大和魂なるものがそれである。而して日本膨張の中核も亦それである」という記述を見ることが出来る。こうした日本人の優位性を強調した言説は、明治後期から散見されたものであつた。南博の研究によれば、日本人論の特徴の変化は次のような枠組みで捉えられている。<sup>(30)</sup>

明治期前半・・・・・・・・日本人劣等説

明治期後半・・・・・・・・日本人優秀説

大正期・・・・・・・・より客観的に日本人を捉える国際主義の傾向

昭和（戦前）期・・・・・・・・いっそう精密に日本の風土や文化が論じられる傾向

昭和（戦中）期・・・・・・・・日本精神論を中心とするファシズム日本人論

このような先行研究の視座をもとに五百木の「世界綜合論」を考える場合、五百木論文より少し遅れて同時代に発表された和辻哲郎の「国民道德論」<sup>(31)</sup>や、今泉定助の「世界皇化論」<sup>(32)</sup>は比較対象として有意なものとなる。なぜならば、同じ時期に主張された同種の言説と比較することによって、五百木論文の同時代的な特徴を掴むことができるか

らである。この二者を比較対象とした理由は、和辻がアカデミズムという五百木とは全く異なる立場に身を置いていた人物であり、五百木が関与した国體明徴運動の時期には追及を受ける側の立場にあった、まさに対極の人物だからである。他方、今泉は宗教家という異なる立場ながら、国體明徴運動において五百木と行動を共にした人物である。こうした異なる立場にあった二者との比較によって、五百木の「世界綜合論」の特質を探っていくこととする。

まず、和辻哲郎は周知のとおり、日本精神から西洋哲学まで多岐にわたる研究で知られ、この当時は京都帝国大学に勤めていた人物である。その和辻哲郎が昭和五年に行った公開講義では、次のような内容が語られている。

いかに西洋文化を取り入れても、日本は決して西洋化してしまうことはなく、日本精神はいよいよ自覚され発揚されるのである。すなわち他のものを介して自己を自覚し、他のものに沈潜することによって真に自己を自覚する運動が人間精神の特徴であるが、このことが西洋文化と東洋文化との間にも起こって来るのである。そうしてかかることをなし得るものは、おそらく世界中で日本人のみであろう。「中略」かように西洋人はできないが日本人のみがなし得るところの任務があり、ここに日本の文化史的意義があるのである。

かくて日本人の展望が開け、日本人の任務が自覚されてくる。日本が日露戦争によって西洋に対して東洋人解放の先鋒となったことは前述のごとくであるが、この東洋人を解放することは、同時に東洋と西洋の文化を統一することになる。すなわち、東洋文化も世界に有力なる文化であるゆえんを宣揚するからである。しかしながら、西洋文化を排しながら東洋文化を主張することは、東西文化の統一とはならない。やはり他に沈潜し他を介して自己に復歸するの<sup>(33)</sup>でなければならない。

このように、和辻哲郎は日本の歴史的使命と「東西洋文化の統一」を論じており、日本の独自性を強調しているの

である。

こうした和辻哲郎の主張は「文化的ナショナリズム」<sup>(34)</sup>として位置づけられているが、日本のみが文化の統一を果たせるものと捉えている点において、五百木良三の「世界綜合論」も同種の論理を有していたといえるだろう。もちろん、五百木良三と和辻哲郎とでは政治的主張がまったく異なる立場にある。和辻はいわゆる「政治的ナショナリズム」に短絡した「日本主義」とは異なる立場にあった。すなわち和辻は、五百木良三が天皇機関説問題に関連して国體明徴運動で示したような「政治的ナショナリズム」に批判的であつたがために、同じく国體明徴運動を主導していた蓑田胸喜から追及の対象にもされているのである。しかし、立場の異なる両者が、日本民族と文化に関する考察において類似する結論を導き出していたという事実は、同時代の思潮を捉える上で重要な示唆をあたえるものである。もとより、和辻哲郎のこうした思想については、戸坂潤が「ヨーロッパ的カテゴリーと大和魂的国粹哲学のカテゴリーとの絡み合った〔中略〕日本主義イデオロギーの最もハイカラな型態」<sup>(35)</sup>であると評しているように、日本民族に関する思考の上で、五百木と和辻が共通の志向性を有していたと捉えることも可能である。

ちなみに、五百木良三と和辻哲郎の両者に交流の跡は見られなかった。和辻が私淑していた夏目漱石と五百木の間には、正岡子規との関係から接点が見られたものの、<sup>(36)</sup>五百木良三と和辻哲郎は管見の限りにおいて無関係である。

さて、一方の今泉定助は、皇典講究所の理事や神宮奉斎会の会長を務めた神道思想家であり、昭和十二年には国體学の講究を目的に日本大学に皇道研究所を開設した人物である。五百木良三と今泉定助との間には交流の跡が見られる。例えば、五百木の『飄亭句日記』の昭和八年一月十九日の記述には、「正午、飯田町の神宮奉斎会に維新案討議参加、頭山、馬場、今泉、田中、吉田、杉山氏外十数名参集」<sup>(37)</sup>とあり、今泉の名を見ることができる。今泉定助の日

記帳をまとめた「日録抄」<sup>(38)</sup>にも、同日に「十二時 維新祭」<sup>(39)</sup>と記されており、五百木の日記に記されていた「今泉」が今泉定助であることが確認できる。その後も、同年十一月十七日には「正午、九段靖国神社社務所に靖国会発起人小集」<sup>(40)</sup>／「十一時 靖国会」<sup>(41)</sup>、十一月二十八日には「正午、靖国神社に靖国会発起会」<sup>(42)</sup>／「十二時 靖国会」<sup>(43)</sup>といった記述をそれぞれの日記に見ることができる。このほか、昭和七年十二月一日に上野精養軒で催された「今泉定助古稀祝賀会」<sup>(44)</sup>に五百木良三が出席していることや、昭和十二年十二月十日に催された「五百木良三・内田良平両氏追悼会」<sup>(45)</sup>に今泉定助が出席していることから、両者が少なからぬ交流を持っていたことがうかがえる。

このように五百木良三とも接点があつた今泉定助が持論としていた主張が「世界皇化論」である。その論旨を、昭和十二年に発表された論文「皇道文化を以て世界人類を救済すべし」<sup>(46)</sup>〔以下、今泉論文と呼ぶ〕から見ていくことにする。この論文は、今泉定助がそれまでに執筆した代表的な論文を自ら編集してまとめた『皇道論叢』の最終章としても収められている。

この今泉論文は三つの節で構成されており、第一節では日本書紀や古事記の記事を引いた上で、「皇祖より下されたる天壤無窮の神勅は、唯天地と共に限りなく栄えるといふやうな簡単な意味ではない。全地球の修理固成、全世界の皇化の為に幾千年の努力を要し、必ずそれが実現して、全世界即ち神州の境に達し、宇宙と一体なる生成発展完成を遂げることを暗示せられたのである。吾々臣民の皇運扶翼の窮極目標も、亦茲にあることを、深く悟らねばならぬ」<sup>(47)</sup>と、「天皇の御本質」を説くとともに日本臣民の任務について論じている。すなわち本節では、「天津神以来万世一系の天皇」は「世界の主宰者」であると位置づけて、「世界の人類は一体に統一せられる時に、真の平和幸福が実現」するという「全世界の皇化」の目的を示しているのである。

第二節では、「皇道世界」の実現が、所謂「世界侵略」とは異なるものである、という点が強調される。ここでは、日本の天皇政治は「しらす」政治であり、霸道主義の国家が世界を領有するために行う「うしはく」政治とは全く異なるものとして説明されている。「しらす」政治と「うしはく」政治との違いについては、昭和十七年に今泉が講述した「世界皇化の聖業」<sup>(48)</sup>から引くのが理解しやすい。

古事記によりますれば、我が国では神代の昔から政治にふたいろの種類を認めてゐるのでありまして、一つは「ウシハク」政治であり、他の一つは「シラス」又は「シロシメス」政治であります。〔中略〕

それでは「ウシハク」といふことは、どういふことであるかと申しますと、学者の間に多少の議論はありますが、けれども、先ずもつて本居先生の考へが一番至当であります。「ウシハク」の「ウシ」は「主」の意味でありますから、国土の主、主人といふことになり、「ハク」は太刀を佩く、靴をはくと、今日でも使われてゐる様に、身に着けることでありますから、その土地の主人となり、土地人民を自分のものとして支配するといふのが「ウシハク」といふ言葉の意味であると思ふのであります。

これに対して「シラス」又は「シロシメス」とは、どういふ意味であるかと申しますと、「知ル」といふ言葉の元から考へるとよくわかるのであります。〔中略〕

天皇の御統治を「シラス」「シラシメス」「ミソナハス」「キコシメス」と申し上げるのは、知る、見る、聞くといふ言葉の示す様に、国土国民を親が子に対するが如く、慈愛の極をもつて包容同化し各処を得しめ給ふを申し上げるのであって、所謂「ウシハク」政治とは全然違つたものであるといふことを皆様に今日は御承知願ひたいのであります。<sup>(49)</sup>

今泉は、このような二つの統治形態の概念をもとに、西洋を覇道の対立文化と見做し、日本の皇道政治を一体文化と位置づけて、両者が「本質を異にする」ことを説いたのである。今泉のこうした視座について、葦津珍彦は「今泉先生の論においては、主としてこの西欧近代国家の『神と訣別』せる世俗的文化の対立闘争の諸現象が、直接的な批判の対象とされている。人間の野性的本能の欲求を『人權』とみとめて、その上に築き上げられた個人主義的民主主義。一国民一民族の野性的な欲求を、物理力によって強行しようとする功利的な強権国家主義。階級の経済的欲求を基礎として、階級闘争によって、その目的を貫徹しようとする共産主義。それらの西欧現代の文化は、その相互の間においては、それぞれに全く異なるものではあっても、神道人たる今泉先生の立場からすれば、いずれも『万有同根一体観』の文化を知らないところの『対立的闘争の功利的文化』として、同質同型のものとして批判されるのである<sup>50)</sup>と解いている。

第三節では、「世界史上に於ける、皇道発揚の意義」が述べられており、ここでは「唯一絶対の真の人類文化」である日本の皇道文化によって「全人類の救済」を行うことが「皇国の神聖なる使命」であることが結論づけられている。

ここまで要点を見てきた今泉定助の「世界皇化論」と、五百木良三の「世界綜合論」には幾つかの類似点が指摘できる。第一には、それぞれの持説を、神道の古典に基いて宇宙の根源神である天之御中主命から説き起こしている点である。五百木論文の第四節で述べられていた主張は、今泉の言説においても「万有は総て、同種異種、近き遠き、それぞれ秩序と段階をば有しながらも、相互に引き合ひ引かれ合ひながら、次第により高き統一体に綜合統一せられ、終局は天之御中主神に帰一して宇宙は渾然たる統一体を形造る。万有は一の例外もなく、天之御中主神の分派分出に

外ならぬからである」<sup>51</sup>といった形で表れている。第二には、西欧文化の捉え方である。五百木良三が利己的な覇道的文化として捉えていた西欧の文化を、今泉定助も覇道の対立文化と見做していたことが確認できた。そして、両者共に日本の皇道によつて西欧の覇道を更生ないし救済すべきであるという結論を導いている。

両者の考えが近いものであったことは、同時代人においても認識されていたことと思われる。それは、両者の共通の知人であった山岡萬之助が記した次の文章から窺うことができる。

曾て私が内務省に居つた当時、議會中心主義は國體に合するものではなく、日本は 天皇中心でなければならぬといふ強い主張をした事があつたが、其の時五百木君が民間にあつて心から之に共鳴し、大きな動きを見せて激励してくれたりした事を思ひ出す。所謂國體明徴問題では同君はいち早く天下に呼びかけて猛運動を開始された。勿論我々は臣民として未来永劫國體觀念を明徴にして常に大御心に添ひ奉らねばならぬものであつて、各々その立場々々によつて真心を竭して行くべきであるが、民間に於ける同君等の熾烈なる運動が今日の國體觀念の明徴を招来したと云つても過言ではあるまい。特に五百木君は眞の國士として一貫した大理想に燃えてゐた。五百木君を知る者の熟知してゐる所の、日本及日本人の眞使命を説いた世界綜合論がそれであつて、まづ赤露を手始めに天意を体して世界皇化の聖業につけといふにある。<sup>52</sup>〔圈点は引用者による〕

この文章は五百木良三が逝去した昭和十二年に、当時、日本大学の三代目総長を務めていた山岡が「心友五百木君」と題して『日本及日本人』に寄せた追悼文の一部である。この中で山岡は、五百木良三の「世界綜合論」を紹介する文脈において、今泉定助の掲げていた「世界皇化の聖業」という言葉を用いている。二人の論旨を山岡が同一視していた証左と言えよう。

#### 四、五百木良三の晩年の言論活動

ここからは、「世界綜合論」を持論とした五百木良三が、晩年にいかなる政治的活動に関与し、いかなる執筆活動を行っていたのかを明らかにする。

昭和四年の秋から『日本及日本人』を主宰した五百木良三であったが、当初は表立って論説を載せることはしなかった。五百木良三ないしは俳号である飄亭の名を冠した記事は、昭和五年から昭和九年にかけては、毎年平均して一〜二篇程度しか見られない。しかし、昭和十年には七篇に増えており、自ら積極的に雑誌に関与するようになってくる。さらに、昭和十年九月には再び誌面の革新を行っており、これ以後、毎号「主張」欄に五百木良三の名で論説を載せるようになった。<sup>53</sup>

五百木良三は『日本及日本人』三一八号（昭和十年四月一日発行）において「所謂機関説問題は昭和維新第二期戦展開の神機」を掲載した。この論文は、国體擁護連合会からパンフレットとしても発行されている。<sup>54</sup> この頃の五百木良三の動きを日記に見てみると、昭和十年三月一日には「夜、日比谷陶々亭小集、天皇機関説打破協議、余主催、会者大竹貫一、菊池武夫、井上清純、井田磐楠、山岡萬之助、赤池濃、木下成太郎、若宮卯之助、葛生能久、入江種矩、増田一悦、其他」<sup>55</sup>とあり、機関説問題に関する会合を主催していたことがうかがえる。これには、貴族院で美濃部達吉を直接追及した菊池武夫も出席しており、当該事件の中枢に五百木がいたことがわかる。五百木良三はこの他にも、三月七日「飯田町、神宮奉斎会に天皇機関説排撃協議会開催、頭山、今泉、佐藤清勝三氏主催」、三月八日「夜、日比谷、三信ビル楼上に天皇機関説撲滅同盟結成、頭山満翁主催」、三月九日「午後、青山会館に天皇機関説排撃に就

き、国體擁護連合会總會開催、会者五百名に垂んとす、非常に盛云」、三月十九日「午後、上野精養軒に機関説撲滅有志大会」といったように、機関説問題に関する諸種の会合に列している。

五百木良三は天皇機関説に關して、「自由民権思想に立脚せる欧米の近代国家が、主權在民を共通觀念とするは当然の帰結である。彼等にとつては寧ろ人民あつての国家であり、国家あつての統治者である。彼等の統治者が自から国民の公僕と称するのも亦た此の觀念の發露であると共に、彼等の元首なるものは国家統治上の一機関たるに過ぎぬ」と、西欧諸国における国家法人觀については當然視する一方で、「然るに万邦に冠絶せる我が皇国日本の国體は、其の天賦の個性に於て、截然として他と撰を異にして居る。即ち我が日本に關する限り、人民あつての国家乃至元首ではなく、天皇あつての国家であり臣民である」として、日本ではその主客が反すると論じている。<sup>56</sup> このような五百木良三の民族主義的な主張は、他の論稿にも一貫して見られるものであった。

五百木のこの論説が掲載された『日本及日本人』三二八号には、「天皇機関説を排撃し大義を明徴す」と題した特集が組まれており、天皇機関説問題に關する二十五名の寄稿を載せている。五百木良三は政教社を率いて實際の政治活動を展開した一方で、『日本及日本人』を彼らの主張を公表する言論機関として活用したのであった。

天皇機関説排撃のキャンペーンを契機として、『日本及日本人』誌上には自由主義的ないし資本主義的機構を改革することを目的とした、いわゆる「昭和維新」の遂行を促す論調が現出する。五百木は「昭和維新は独り国内のことではない。意義は世界皇化一新に在る<sup>57</sup>」として、その維新の過程を三段階に分けて捉えていた。

私は日本の近状につき、自分だけにきめて居ます。それは先づ満州事件から起つて昨年の昭和九年の華府条約破棄迄を昭和維新第一期とし、本年の国體明徴問題を第二期としてゐるのであります〔中略〕。

それから昭和維新第三期に移るので、それは日蘇問題の展開した時であります。これに対して日本人の使命は、第一に一億幾千万人の生霊を、赤鬼共産党の手より救ひ出してやる事でなければならぬ。其と同時に支那の四億の蒼生を、今日の地獄より助け出すことであります。支那は日本の力以外には救はれるものではありません。日支親善などと空念仏では、いつまでたつても無駄な事です。其の日本の力を知る支那の出現するのは、日本が赤蘇を退治した時であります。即ち支那救済の先決問題として赤蘇救済があらねばなりません<sup>58</sup>。

このように、晩年における五百木の活動には、国體明徴運動への積極的な関与と、「世界綜合論」の実践段階としての対ソ戦の主唱といった言論活動とが見られた。五百木良三は逝去する前月まで、『日本及日本人』にこうした主張を書き続けた。五百木の激しい主張に対しては、当局から『日本及日本人』の発売頒布を禁止する処分が下されることもあったが、五百木はこうした処分に対して、翌月の「主張」欄を白紙掲載して「無言」で抗議するといったことも行っている<sup>59</sup>。すなわち、「主張」欄に「無言の主張」と論題だけを掲載して、多言を弄することなく抵抗を示してみせたのである<sup>60</sup>。

## 五、結語

ここまで、五百木良三の政治的思想について、彼が主唱した「世界綜合論」を中心に検討を行ってきた。本稿の課題であった「世界綜合論」の論理と、同時代における位置づけがいかなるものであったのかを総括し、今後の研究課題を提示することで結びに代えたい。

「世界綜合論」とは、世界の人々の役割に関して、「分業的創作者」として文化を創造する者と、それらを包容して

人類文化へと総合していく「総合的分業者」とに分けて論じたものであり、後者の役割を担うのが唯一、日本民族であるとする主張であった。「世界進出」を高唱した五百木良三のこのような主張は、かつて近衛篤磨の下で涵養したアジア主義の政治思想と親和性を持つものであり、思想的に当時の積極的な大陸政策を正当化するものであったことは間違いない。

また、「世界綜合論」の中で唱えられていた文化観を同時代的に捉えみると、「西洋文化を理解しつつ、しかも東洋の伝統を内に活かせるものは日本のみなり」<sup>61</sup>という日本の文化史的意義を主張した和辻哲郎の「国民道德論」に類似性を見ることができた。

しかし、両者の比較文化観は、その論拠とする点が異なっていた。和辻哲郎のこうした議論は「他に沈潜し他を紹介して自己に復帰する」という日本の精神文化の観察から導き出されたものであり、このことは「西洋人は自分たちのもののみを完全無欠と考え、かかる自主的な立場に立つて単に東洋文化の外観のみを見るのであるから、他を介して再び自己に帰るところの自覚運動は、彼らには決してできないのである」<sup>62</sup>という記述からも窺うことができる。一方、五百木良三が日本を「総合的分業者」として位置づけた論拠には、「天之御中主命」を民族思潮の淵源とすることが掲げられていた。このような主張は、むしろ今泉定助の「世界皇化論」に近いものであった。

そもそもが神道家である今泉定助がこうした神話を引いた主張を行ったことは当然の事として、それでは、五百木良三はいかにして「世界綜合論」を着想し得たのであろうか。先に挙げたように、五百木と今泉には交流の跡が見られたため、双方が何らかのかたちで思想形成に影響を与えていた可能性は否定できない。しかしながら、五百木論文が公表された昭和四年の時点では、現在確認できる資料の範囲において今泉と五百木の交際は確認できていない。そ

のうえ、「世界綜合論」の原型とも言うべき主張が見られた「世界の維新と日本の天職」が発表されたのは、大正五年のことであることも確認できた。五百木良三の思想形成の過程を明らかにするためには、本稿第二章でも触れたように壮年期の活動を詳らかにしていく他はないようである。

本稿のはじめに掲げた「言論活動と実践的な政治活動の両方を担った五百木良三を通して、当時の時代思潮を捉える一助としたい」という点に関しては、五百木良三の「世界綜合論」の論理を明らかにし、その同時代的特徴を提示できたことで、その目的を達せたとと言えるだろう。詳らかにし得なかった五百木良三の思想形成過程の一部に関しては、史料の掘り出しの成果を期して、今後の課題としたい。

#### △注▽

(1) このほか五百木良三には、医師としての顔や子規派の俳人としての顔もある。松山医学校と大阪の開業医のもとで医学を学び、十九歳で医者免許を獲得した。日清戦争時には看護長として第五師団に従軍している。また、同郷の正岡子規と寄宿舎が同じであった縁から句作に興じるようになり、飄亭の号で「日本俳句」黎明期の一翼を担った。初期の作品は子規関連の文書によって、後期の作品は『飄亭句日記』（政教社刊）に見ることができる。

(2) 詳しくは、拙稿「対外硬派と櫻田倶楽部―小川平吉と五百木良三の活動を中心として」『法政論叢』四九巻二号、日本法政学会、二〇一三年。

(3) 詳しくは、拙稿「政教社のロンドン海軍条約反対運動に関する一考察」『政経研究』五一巻二号、日本大学法学会、二〇一四年。

(4) 例えば、西園寺公望の私設秘書であった原田熊雄の日記（『西園寺公と政局』第一巻、二十三頁）には「内田良平などと轡を並べる浪人の五百木」という記述があり、同じ年に死去した五百木良三と内田良平は合同の追悼式が催されている。また、

病床にあった五百木良三を近衛文麿首相が見舞ったニュースは中央紙が写真付きで報じている（「忙中に一場『涙の青年首相』病篤き亡父の知友を慰問」『東京朝日新聞』一九三七年六月十二日夕刊、「病床の五百木氏を近衛首相がお見舞」『東京日日新聞』一九三七年六月十二日夕刊）。

- (5) 小林昌樹編『雑誌新聞発行部数事典』（金沢文圃閣、二〇一一年）を参照。例えば、同じ時期に発行されていた『大日』や『時事評論』はともに二〇〇〇部程度。無論、当該時期に派生した政治団体の機関誌とは体裁・部数ともに比べるべくもない。
- (6) 前掲拙稿（二〇一四年）、一六五頁。
- (7) 松本健一『昭和史を陰で動かした男―忘れられたアジテーター・五百木瓢亭』新潮選書、二〇一二年。五百木良三に関しては、正岡子規や近衛篤磨といった周辺人物の研究の中で部分的に言及されてきたものの、長らく主題として論じられることがなかった。

- (8) 阿部里雪『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社、二〇〇四年、二七二頁。
- (9) 藤田禎一郎「幼かりし日の思ひ出」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、七頁。なお、千舟学舎への入塾の時期に関して、藤田は「十六年」と述べているが、五百木良三が千舟学舎に通い始めた時期は明治十八年と思われる。
- (10) 対外硬運動の詳細に関しては、酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（東京大学出版会、一九七八年）を参照。
- (11) 「近衛霞山公追憶座談会記」『日本及日本人』二九〇号、一九三四年、八十三～八十五頁。
- (12) 雑誌『東洋』創刊の経緯については、拙稿「雑誌『東洋』と『日本週報』」（『出版研究』四十三号、二〇一二年）に詳しい。

- (13) 『近衛篤磨日記』第四卷、鹿島出版会、一二二頁。
- (14) 前掲「近衛霞山公追憶座談会記」、八三頁。
- (15) 横矢重道「近衛公と五百木」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、三十八頁。
- (16) 五百木良三の政教社社長就任の経緯については、前掲拙稿（二〇一四年）で詳しく扱った。
- (17) 阿部里雪前掲書、二〇〇四年、一五〇頁。阿部里雪は五百木良三が社長に就任した昭和四年に政教社に入社した人物であ

り、「飄亭先生はいつも超然として編集の方にはあまり口出しをしなかった。編集の方に注意しだしたのは神田の猿樂町に移ってから以後の事であり、終わりには自ら筆を執って主張を毎月書くようになったが、これはいよいよ後の事だった」と述懐している。

(18) 川田瑞穂「志士と策士との両面」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、一七三頁。五百木良三は政教社の社長に就任した後、牧野謙次郎に宛てた書簡の中で、紙面の方針をこのように一変すると書き送っている。

(19) 「日本民族の個性と其の使命（皇道日本の分担的天業）」『日本及日本人』一八八号、四〇十八頁。

(20) 五百木良三「日本民族綜合天職論…日本民族の個性と其使命、皇道日本の分担的天業」田中末広編『先覺諸家南方建設論選集』帝国書院、一九四二年、四十五～六十二頁。

(21) 岩崎一高「追憶五百木良三君」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、三十一頁。

(22) 佐藤天風「田中と五百木翁」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、八十六頁。

(23) 「日本民族の個性と其の使命」『日本及日本人』一八八号、一九一九年、八頁。

(24) 例えば、五百木良三「東は王道の和光、西は霸道の暗影」『日本及日本人』三一九号、五百木良三「白人文化の自壊作用」『日本及日本人』三二九号。

(25) 五百木良三「日滿両国民の使命」『日本及日本人』二六一号、一九三二年、九頁。

(26) 五百木良三「皇化使命必然の一道程」『日本及日本人』三四一号、一九三六年、四頁。

(27) 五百木良三「世界の維新と日本の天職」『一大帝国』一卷一号、一九一六年。

(28) 五百木良三前掲論文、一九一六年、六頁。

(29) 後藤新平『日本膨張論』大日本雄弁会、一九二四年、十一～十二頁。上記は再版本による（初版は一九一六年）。

(30) 南博『日本人論』岩波現代文庫、二〇〇六年、四五一頁。

(31) 和辻哲郎の「国民道德論」に関しては、湯浅泰雄『和辻哲郎』（筑摩書房、一九九五年）および荻部正『光の領国 和辻哲郎』（創文社、一九九五年）を参照。なお、和辻は「国民道德論」と題する著作物を出していないが、昭和五年に京都帝国大

学で開かれた陸軍省主催の講演内容を筆記したものが「国民道德論」として残されている。また、自筆の史料として、このときの講演に関する草稿と「構想メモ」が残されている（『和辻哲郎全集』別巻一所収、岩波書店、一九九二年）。

- (32) 今泉定助の「世界皇化論」に関する先行研究としては、葦津珍彦「今泉定助先生の世界皇化論」（『今泉定助先生研究全集』第一巻所収、日本大学今泉研究所、一九六九年）や、川島啓介「今泉定助と西田幾多郎の世界新秩序論」（『神道研究集録』二十八号所収、國學院大學大学院文学研究科神道学専攻、二〇一四年）がある。

- (33) 和辻哲郎「国民道德論」『和辻哲郎全集』別巻二、岩波書店、一九九二年、七十九～八十頁。

- (34) 湯浅泰雄『和辻哲郎』筑摩書房、一九九五年、一七六頁。

- (35) 戸坂潤「世界の一環としての日本」『戸坂潤全集』第五巻、勁草書房、一九六七年、九十五頁。初出は一九三七年。

- (36) 例えば、荒正人『漱石研究年表』（『漱石文学全集』別巻）集英社、一九七四年、一二三頁。

- (37) 五百木飄亭『飄亭句日記』政教社、一九五八年、一八〇頁。

- (38) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第一巻に、日記帳と『皇道発揚』誌の記事をもとに、昭和六年七月一日から昭和十九年九月十一日までの今泉の動静記録がまとめられている。

- (39) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第一巻、一九六九年、三九一頁。

- (40) 五百木飄亭前掲書、一九五八年、二一五頁。

- (41) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第一巻、一九六九年、三九六頁。

- (42) 五百木飄亭前掲書、一九五八年、二一七頁。

- (43) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第一巻、一九六九年、三九六頁。

- (44) 五百木飄亭前掲書、一九五八年、一七四頁。

- (45) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第一巻、一九六九年、四二二頁。

- (46) 今泉定助『皇道論叢』櫻門出版部、一九四二年、七四六～七五六頁。初出は『皇道発揚』昭和十二年十月号巻頭論文。

- (47) 今泉定助「皇道文化を以て世界人類を救済すべし」今泉前掲書、七四九頁。

(48) 日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第三卷所収、七〇四―七三六頁。

(49) 今泉定助「世界皇化の聖業」日本大学今泉研究所編『今泉定助先生研究全集』第三卷、七〇九―七一二頁。

(50) 葦津珍彦「今泉定助先生の世界皇化論」『今泉定助先生研究全集』第一卷所収、日本大学今泉研究所、一九六九年、六一五頁。

(51) 今泉定助「万有の親和力」今泉前掲書、一九四二年、一二二頁。初出は『皇道発揚』七五号、一九四一年十一月。

(52) 山岡萬之助「心友五百木君」『日本及日本人』三五一号、一九三七年、一三五頁。

(53) 五百木良三が政教社社長だけでなく、主筆も兼ねるようになった背景に関しては、前掲の拙稿（二〇一四年）で考察を加えた。

(54) 五百木良三『所謂「機関説問題」は昭和維新第二期戦展開の神機』国體擁護連合会、一九三五年（NDL 00000631961）。

(55) 五百木飄亭前掲書、一九五八年、二七二―二七三頁。

(56) 五百木良三「所謂「機関説問題」は昭和維新第二期戦展開の神機」『日本及日本人』三二八号、一九三五年、二―十頁。

(57) 五百木良三「昭和維新第三期」『日本及日本人』三三二号、一九三六年、八頁。

(58) 五百木良三「日本の使命」『皇国の真相を凝視せよ』大日本愛国義団本部、一九三六年、四四頁。

(59) 五百木良三「無言の主張」『日本及日本人』三三七号、一九三六年、二―三頁。

(60) この「無言の主張」には囲み記事が付されており、「言を発すれば舌禍を招く恐れあり、文を作せば筆禍を買ふの憂がある。此の際我等の取るべきものは、唯夫れ無言の主張か。零は一切の数である。無は一切の有である。無言の主張は即ち千萬無量の主張を含む。形なきに見、声なきに聞く者は克く之を解す。想ふに今の時、之を知り之を解するものは、恐らく当面得意の上層群にあらずして、寧ろ更生日本の新生命に燃え立ち来れる一般の下層群にあらう。然り、此の更生日本の新生命こそ、我等が無言の主張をして、奔雷を圧する默雷たらしむる者である」と、その意味が綴られている。

(61) 和辻哲郎「国民道徳論」『和辻哲郎全集』別巻二、岩波書店、一九九二年、七九頁。

(62) 和辻哲郎「国民道徳論」『和辻哲郎全集』別巻二、岩波書店、一九九二年、七九頁。